

『愛しの従兄弟(いとこ)は漫画家様』

著: 若月京子

ill: 明神 翼

これから四年間を過ごすことになる家で、七生はスーパーからの配達に来るまで、自分の荷物の整理をすることにする。

先に送った箱は部屋の隅に積んであって、七生はガムテープを剥がすとキビキビした動作で中のものをタンスや机の引き出しへと移していく。

どれくらい収納できるか分からなかったのだから、服は春と夏のものしか送らなかったから、タンスは半分も埋まっていない。これなら冬物を入れても余裕がありそうだ。

広い部屋に家具、テレビまで用意してもらった。それに他はどこもホコリっぽいのに、宗弘は忙しい合間を縫って七生の部屋だけは掃除しておいてくれたのだ。

その心遣いが嬉しいし、宗弘とうまくやっていきたいと思う。

すっかり整理が終わった自室を出ると、七生はキッチンへと向かう。

スーパーで購入したものを収納する前にホコリを取っておきたいから、掃除をする必要がある。

「まず、冷蔵庫」

飲み物と調味料しか入っていないからスッキリしているが、購入してから一度も掃除していないんだらうな……と思うと、綺麗にしておきたい。

七生はいったん中身を取り出し、丁寧に拭いていった。

それからキッチン中の戸棚を開けて掃除する。

まったく使っていないから新品同然で一般家庭の台所のような油汚れはついていないがホコリは積もっているし、隅々まで綺麗にするのはなかなか大変だった。

「はにや～……」

ようやく満足できるまで綺麗にしたときには疲れてしまい、冷蔵庫から頂戴したスポーツドリンクを飲んで脱力する。

「これは確かに、家事をする人がいるよな～。なんか変に遠慮するよりバリバリやっちゃっていいよね？」

家の中の状態を見れば、宗弘がどれだけ忙しいか分かる。

せっかく立派な家なのに、どこもかしこもホコリだらけだし、乾燥機には洗濯物が入れっぱなしだった。

自分でできない以上、家政婦を雇う必要があるのは明白だ。

七生は、自分ならその役割がこなせるという自信があるので、居候させてもらううえにアルバイト代までもらうのは……という後ろめたさはなくなり、得意な家事の腕を生かすチャンス到来とばかりにやる気が湧いてきた。

「……おっと、スーパーの人かな」

ピンポンというチャイムの音に七生は慌てて立ち上がり、階段を下りていく。

仕事部屋から出てこようとしたアシスタントに、「オレの頼んだ配達だと思うので」と言い、対応に出る。

米や味噌などズッシリと重量のあるそれは、一回では運びきれない。七生は二回に

分けて運び、手際よく収納していった。

「数日でも早めに来てよかった」

ホコリっぽい家で暮らしたくないし、大学が始まってから家中を掃除して回るのは大変だ。本当は一気に大掃除をしたいところだが、夕食の支度もあるし、今日できることは限られている。とりあえず優先順位の高いところから……と、七生は精力的に掃除して回った。

時間を見て一休みしてから、今度は夕食作りに取りかかる。

中丸の話では仕事は大詰めですいぶん大変そうだ。きちんとした食事というより、仕事の合間に手軽に食べられるものが多いということだった。

少し考えて、炊き込みご飯を作ることにする。

もち米を混ぜ、少しやわらかめに炊くと、中丸の助言に従って一口サイズのお握りを大量にこしらえた。ついでに野菜たっぷりの豚(とん)汁(じる)も作り、お椀ではなくドッシリと安定感のあるマグカップによそって一階へと運んだ。

この家のキッチンには、料理運搬用の小さなエレベーターがある。箱の中が三段に分かれたそれを使えば、一度に料理を運べてしまうのだ。

「これ、すごい便利だな～」

男四人分の食事を二階から一階に運ぶのは大仕事だ。大きなお盆や鍋を持っていたりして足元がよく見えない状態で階段の昇り降りをするのは怖いし、エレベーターがなければ何往復することになるか考えただけでうんざりする。

七生は開け放してある仕事部屋の扉をノックし、それぞれの机の上にお握りと豚汁を置きながら言う。

「食べやすくしたので、温かいうちに食べてください」

「た、炊き込みご飯！」

「豚汁…いい匂いだあ」

疲れきった様子だった彼らも、食べ物の匂いに刺激され意識がはっきりしたようだ。

そそくさと机にあるウエットティッシュで手を拭くと、もう空腹を我慢できないといった様子でお握りを頬張り、豚汁をすする。

「旨い！ 旨いよ～。手料理なんて久しぶりだ」

「なんか、優しい味がする……。旨すぎっ」

「先生の従兄弟くんだよな？ オレたち、これからここに来るたびにこんなのが食えるの？ マジ、嬉しいんだけど」

「本当だね。感謝、感謝。——あ、チーフアシスタントの米(よね)田(だ)です。よろしく」

「三咲七生です。よろしくお願ひします」

「御(み)木(き)本(もと)で一す。七生くん、可愛いね～。オレ、キミの手料理に惚れました！」

「同じく、高(たか)野(の)です。お代わりありますか!？」

「ありますよ。お握りですか？ 豚汁？」

「両方！」

「オレも！」

まだ食べ始めたばかりなのに、お代わりを求めるということは、一見してもう足りないという判断らしい。

「ええっと…それじゃ、お握りのお代わりが欲しい人。何個くらいですか？」

「二つ…いや、三つ、お願いします」

「オレは四つで！」

「三つ」

「二つ、よろしく」

小さいとはいえ、最初の人に一人五つ…茶碗にして二膳分近くを持ってきている。それを考えたら、ずいぶんな食欲だった。

「じゃあ、ちょっと作ってきます」

「お願いしま〜す」

二階に戻った七生は、炊飯器を開けてお握りを作り始める。

「多めに炊いておいてよかった……」

彼らがどれだけ食べるか分からなかったから、残るのを覚悟でかなり多めに炊いたのだ。余ったのは夜食用に置いておけば食べるかと思ったし、冷凍したって問題はない。

けれどこの分ならなくなりそうだと分かって、七生はお握りを作りながら夜食はどうしよう考える。

ついでに豚汁も温めて、自分の分を取り分けてからお握りと一緒に鍋ごとエレベーターで一階へと送った。

炊き込みご飯も豚汁も、七生からするとそう難しいものではないのだが、手料理に飢えていた彼らには嬉しかったらしい。

美味しい美味しいと食べてもらえて、お代わりとともに絶賛されるのは嬉しいが、あいにくと相手は不精ヒゲのむさくるしい男たちばかりである。しかもしばらく風呂に入っていないのか、ほのかに異臭もする。惚れただの、嫁になってくれただのと言われても嬉しくなかった。

やれやれと思いつつ空になった鍋や食器を二階へと移動させ、自分も取り分けておいたもので夕食にする。

量は、旺盛な食欲を見せた彼らの半分もない。

「でも、まあ、これであの人たちの食事量はだいたい分かったし。寝る前に夜食を作って、お風呂は…入らないんだらうなあ、あの様子だと。明日の朝までだって言ったし」

食事の彼らは元気だったから、いろいろ聞いてみたのだ。

見込みでは明日の朝には終わる予定で、夜食は欲しいが朝食はいらないと言われた。原稿が終わったら、すぐにベッドに倒れこむつもりらしい。一眠りしてからでないと、家に帰ることもできないそう。

「漫画を描くのって、大変なんだなあ」

七生にできるのは、大変な彼らの仕事環境を清潔で快適なものにし、食事を提供することだけだ。

世話をする相手があんな疲労困憊している男たちだとは思わなかったが、家を綺麗にして食事を作るだけなら七生には自信がある。

完璧主義などところがあるので、アルバイト代に見合うのはもちろん、来てくれてありがとうと感謝されるレベルまでとことん世話してやろうと思った。

本文 p25～32 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>